



# 門前町の特性を 活かしたまちづくり



ながおか ひでと  
**長岡 秀人**  
いずも  
出雲市長(島根県)



すずき けんいち  
**鈴木 健一**  
いせ  
伊勢市長(三重県)



まつなが きよひこ  
**松永 清彦**  
かいつ  
海津市長(岐阜県)



えのもと まさき  
**榎本 政規**  
つるおか  
鶴岡市長(山形県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお  
**細川 珠生**

政治ジャーナリスト

有力な寺院や神社への参詣客を迎え入れるまちとして発展した門前町。歴史的な建造物や町並み、伝統に基づいた暮らしぶりなど、まちの魅力を高める観光資源としても価値が高まっています。神社・仏閣などを中心としてさまざまな行事や慣習を今も受け継ぎながら、各地域では住民を巻き込んだ町並み保存やにぎわいの形成などの取り組みが進められています。

座談会では榎本・鶴岡市長、松永・海津市長、鈴木・伊勢市長、長岡・出雲市長にお集まりいただき、それぞれの門前町の特徴や、活性化策の内容、今後の取り組みなどについて、幅広くお話しいただきました。  
(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

門前町の住民が自ら、  
出羽三山の精進料理を  
誘客に結び付ける  
プロジェクトを推進。  
大きな成果を挙げています。



榎本 政規  
鶴岡市長(山形県)

門前町は地域に欠かせない観光資源

**細川** 近年、日本人はもとより、外国人観光客においても、神社・仏閣に対する関心が高まっています。同時に、多くの参拝者を迎え入れ、発展した門前町ならではの伝統的な町並みや昔ながらの地域文化も、貴重な観光資源として注目を集めるようになっていきます。

それでは、まず各都市に形成されている門前

町の特徴と、活性化に向けた取り組みについてお話しください。

**榎本** 鶴岡市の月山、羽黒山、湯殿山を総称した「出羽三山」は、古くから山岳修験の霊場として知られてきました。聖徳太子の従兄弟に当たる蜂子皇子によって約1400年前に開山し、長らく真言宗、天台宗など、仏教の宗派によって奉仕されてきましたが、明治期の神仏分離以後は「出羽三山神社」として新たな歴史を刻んできました。

この出羽三山神社の門前町を形成しているのが、伝統的なかやぶき屋根の宿坊など、歴史的な町並みが残る羽黒町手向地区の集落です。住民たちが参拝に訪れる各地の講中（信仰者の集まり）の皆さんをもてなし、山の案内役などを担ってきたほか、修験道と結びついた祭祀行事など、固有の地域文化や生活様式を何代にもわたり、大切に継承してきました。

手向地区には27もの宿坊がありますが、いかにこうした地域文化を守り、後世に伝えていくかは、市としても大きな課題です。そこで、鶴岡市ではこの地区を重点区域の一つに位置付けた上で、「歴史的風致維持向上計画」を策定、平成25年に国の認定を受けることができました。

現在、地区の区長さ



門前町を歩いて「秋の峰」(修験)に入る修行者たち(鶴岡市)

んをはじめ、住民の方々、関係団体の皆さんと連携しながら、同計画に基づき、独特な景観や地域特性に応じた町並み整備、風致向上に向けた取り組みを進めているところです。

**松永** 木曾、長良、揖斐の三川が市内を流れる海津市は、長良川河口堰ができるまで、洪水多発地域として知られていました。同時に、市内には養老山地、海拔ゼロメートル以下の平地も形成されるなど、日本の縮図ともいえる、山、川、平地の変化に富んだ自然環境が広がっています。

この海津市のちょうど平地に当たる平田地区に位置するのが「おちよぼさん」の愛称で親しまれている千代保稲荷神社です。名前の由来は、源義家の六男義隆が分家する際に、祖先の霊璽、宝剣、義家の肖像画を「千代に保て」と賜ったことにありますが、やがて室町時代になって、森八海が義家公から授けられた源氏の霊璽を祀るようになったのを機に、神社としての歴史が始





月末月初を中心に、多くの参拝者が訪れる千代保稲荷神社の参道(海津市)

まりました。現在は、日本三大稲荷の一つとして、おちよぼさんには、商売繁盛、家内安全を願う年間200万人の参拝者が訪れています。このおちよぼさんの特徴を一つ挙げるとしたら、定期的に参拝する人が非常に多いということでしょう。ほかのお稲荷様と違って、あえてお札やお守りを販売しないという事情もあり、月末月初には毎回多くの人が詰め掛け、およそ800m続く参道は人通りが絶えません。それに伴って、近年は参道に出店する店舗が大幅に増えています。かつてこの参道は、地域の食文化でもある「川魚」を提供するお店が10軒ほど並んでいた程度でしたが、今では120軒を超えます。しかも、飲食店だけでなく、ラーメンやお蕎麦屋さん、カレー屋さんなど、バラエティ豊かなお店が軒を連ねるようになりました。

こうした中で、行政としても活性化に尽力し、近年は、参拝に訪れる高齢者の利便性を考えて、石畳の道路をより歩きやすい形に改修したり、トイレの整備を進めるなどしています。

**鈴木 伊勢市**は伊勢神宮の鳥居前町(門前町)として発展したまちです。特に1300年前



松永 清彦  
海津市長(岐阜県)

門前町のにぎわいを生かして、「道の駅」も開設。基幹産業である農業振興にも結び付けることができました。

から続く、20年ごとの式年遷宮の際には、全国から多くの参拝者が訪れます。今回の第62回神宮式年遷宮においても、遷宮最大の祭事「遷御の方々にお越しいただきました。」この遷宮は伊勢神宮だけでなく、伊勢のまちにとっても大きな節目で、まちづくりもこれ

合わせて官民一体で展開されてきた歴史があります。

内宮周辺のまちづくりもその一つです。かつて内宮前のおはらい町への来訪者数が約20万人にまで減少した時期がありましたが、昭和54年に「次のご遷宮までに何とかせないかん」を合言葉に、地域住民約20名を発起人とする「内宮門前町再開発委員会」が発足。同時に民間企業によるおかげ横丁の整備も進められました。併せて、行政も平成元年に「伊勢市まちなみ保全条例」を制定し、まちなみ保全事業や無電柱化工事などを推進した結果、おかげ横丁入込者数は、平成6年には約201万人、平成25年には約655万人と、飛躍的に増加しました。

外宮周辺のまちづくりも同様です。近年、民間の商業施設の撤退により、衰退が著しかったこともあり、今回の遷宮に向けては伊勢神宮による「せんぐう館」の開館、市民等からの寄附による鳥居型モニユメントの設置、屋台市やバルをはじめとしたソフト事業など、民間主導の活性化策が展開されました。加えて行政も駅前広場のリニューアルや民間ホテルの誘致などに取り組んだ結果、外宮周辺の活性化に成功したばかりか、外宮の参拝者数の大幅増にもつながりました。

**長岡 伊勢神宮**と同様、出雲大社でも、約60年に1度の「平成の大遷宮」が平成20年4月から8年にわたって行われています。特に、大国主大神が本殿にお遷りになる「本殿遷座祭」が執り行われた平成25年には約800万人もの参拝客が訪れました。

出雲市でも、今回の大遷宮に向けて、さまざまな事業を行いました。中でも大きな成果が



官民一体の「まちなみ保全事業」が進められたおはらい町(内宮前)の様子(伊勢市)

挙げたのが、クルマ社会の到来により歩行者の往来が減少し、シャッター通り化してしまった参詣道「神門通り」の再生事業でした。

県、出雲市、地元住民が一体となつて、かつて往来が絶えなかった通りのにぎわいを取り戻そうと、歩行者優先の考えに基づいた道路の幅員構成の変更、オリジナル照明やポケットパークの整備、沿道の町並みの景観づくりなどを推進した結果として、沿道に出店するお店の数も、従来の30店ほどから78店にまで増えるとともに、通りに活気も戻ってきました。

中には1日に1000万円を売り上げる店舗も現れるなど、地域経済の振興にも大いに貢献しています。日本銀行松江支店では平成25年度の経済波及効果を344億円とはじき出しましたが、実際はそれ以上ではないかと考えています。

### 活性化の成否を分けるのは住民意識

**細川** いずれの都市もそれぞれの事情や特性に応じて門前町の整備に取り組まれています。行政主導というより、民間や住民と連携して、取り組みを進めているところに共通点があるように思いました。民間企業や、住民を巻き込んで

遷宮は、伊勢のまちにとっても大きな節目。まちづくりもこれに合わせて官民一体で展開されてきた歴史があります。



鈴木 健一  
伊勢市長(三重県)

で施策を進めるメリットや、うまく展開させる秘訣についてお聞かせください。

**松永** 民間の発想、アイデアはすごいものがあります。近年は先程も紹介したように、おちよぼさんの参道に新しい店舗が続々進出しているのですが、中には飲食店に限らず、衣料品を販売するなど、個性重視の店舗が増えています。これがまた人気を集めていて、他県からも買い

物にいらつしやる方までいるようです。まさに、行政には考え付かない民間ならではの知恵ですね。感心することしきりです。

**長岡** よく「若者」「バカ者」「よそ者」がまちを元気にするといいますが、確かに出雲市でも新規出店する方々は「よそ者」ばかり。彼らの活躍が、観光客の増加に結びついています。皆さん、独自のアイデアを発揮して、まちの活性化に貢献されています。

それと同時に、出雲市は地域住民も非常に協力的で、参画意識も旺盛です。今回の道路の整備に関しても、住民が積極的にワークシヨップに参加し、さまざまな意見を出してくれました。その意味で民間主導、行政の後方支援型の道路整備だったと考えていますが、それがうまくいった秘訣だと思います。

**榎本** やはり住民意識はまちづくりに欠かせない要素だと思います。元来、出羽三山は修験の山ですから、もともと観光地の側面は強くありません。何しろ、出羽三山のうち月山と湯殿山は、修験の山として明治10年までは女人禁制でしたから、そもそも観光客を広く受け入れようという発想もなかったわけです。

近年は、講中を組織していた太平洋側の地域が東日本大震災で被害を受けたこともあり、参拝者の減少傾向が続いており、その立て直しが課題となっています。ただ、この手向地区では「よそ者」を当てにしているだけでは、活性化は図れません。一方で、人口減少時代のため、「若者」も地域に残らない状況です。

そうした苦しい状況下で、近年、大きく変わったのが手向地区の住民の皆さんの意識です。長年継承されてきた出羽三山の精進料理を





長岡 秀人  
出雲市長(島根県)

「民間主導、行政  
後方支援型」を旗印に  
出雲大社の参詣道の  
整備を実施。住民参加が  
成功の秘訣と考えています。

誘客に結び付けようと、「出羽三山精進料理プロジェクト」を推進。おかみさんや旦那衆が連携して料理の試食会や全国への情報発信、弁当の販売などにも取り組んでいます。

**鈴木** 市内には式年遷宮の一環として、「お木曳行事」や「お白石持行事」など、住民主体の「奉曳団(奉献団)」が参加する民俗行事も受け継がれています。私も神殿の造管用材の原木を、

内宮・外宮の神域内に曳き入れる「お木曳行事」に参加してみようという感覚は、こうした行事が持っている、伝統の重みでした。行政の歴史など、比べものにならないほど、長い歴史を有していますから、住民の皆さんも行事そのものを重んじ、大切にされていることがよく理解できました。

さらに、行事には子どもたちも昔から伝わる木遣り唄の唄い手として参加しますから、伝統は途切れませんし、20年後には自分たちが行事を担うんだという自覚も芽生えます。地域に伝わる伝統行事が、住民とともに歴史を刻み続ける貴重な機会にもなっているわけです。

**長岡** 旧暦の10月は、全国から八百万の神々が出雲の国に集まるという言い伝えがあります。出雲市ではこの期間、歌舞音曲や夜の外出を慎むことが習慣として残っています。

確かに、こうしたきたりは、わずらわしいという考えもあるでしょうが、これがあるからこそ、伝統文化は守られるし、地域への愛着や誇りも生まれるのだと思います。

実際、今回の「本殿遷座祭」を翌年に控えた平成24年の2月には、大遷宮を盛り上げようと、大社地区の住民自ら、決起集会を開きました。参加者のほとんどが、商人では



ありません。自分の利益とは関係ないにもかかわらず、地域を挙げたおもてなしに協力する。伝統に対する高い意識や理解があるからこそできることだと思っています。

門前町のにぎわいがもたらす  
地域への波及効果

**細川** 門前町という貴重な地域資源をまち全体の活性化につなげることも重要です。そのため有効な仕掛けや方策などはございますか。

**鈴木** 海津市では、門前町のにぎわいを、基幹産業である農業振興に結び付けたいと、2つの道の駅をオープンさせました。おちよぼさんの参拝を兼ねながら、新鮮な野菜を購入できると、参拝客から大変好評です。一方で、新たな販路ができたことで、張り合いを感じている農家の方も増えているようです。

**鈴木** 伊勢市では、高齢者や障がいをお持ちの方も安心してお越しただけできるよう、バリアフ



再生事業の進展で、活気を取り戻した出雲大社の参詣道「神門通り」(出雲市)



細川 珠生  
(政治ジャーナリスト)

### 門前町が抱える課題と、 求められる国からの支援

**長岡** 出雲市におけるこれからの課題は、ポスト遷宮を見越したまちづくりをどう展開させるかということだと思います。方策の一つとして、今回、整備した神門通りを核に、さらに周辺の参道なども活性化し、まち歩き範囲を広げるとともに、地域が長年継承してきた暮らしそのものを多くの人に見ていただきたいと考えています。

**細川** 歴史のある門前町の活性化、整備などを進めるに当たっては、さまざまな課題もあろうかと思っています。最後にそうした課題解決に向けて、国への要望などがありましたら、ぜひお聞かせください。

**榎本** 鶴岡市では、国土交通省、文部科学省(文化庁)、農林水産省により、歴史的風致維持向上計画の認定を受けましたが、町並みや景観の整備にかかる費用をすべて住民負担で行うことはできません。ぜひ、国からの対応の支援を望みたいと考えます。

**松永** 海津市にも国登録の有形文化財がありますが、規制が強く観光資源として活用するのは容易ではありません。こうした分野の規制緩和も進めてほしいです。

**鈴木** 日本はフランスやイタリアなど、観光が盛んな国に比べて、圧倒的に観光関係の予算が少ないのが現状です。観光立国を推進するには、手厚い予算配分が必要だという事実を広く共有することも大事なことだと思います。

**長岡** 訪日外国人観光客が増加する中で、今後は伝統的な文化が息づく地方都市に目を向ける外国人も増えてくることでしょう。そうなれば、

リー観光に力を入れていきます。その観点から、宿泊施設のバリアフリー改修に関する補助制度を設けたところ、利用者はもちろんのこと、働いている高齢の方の利便性も大いに高まったとの評価をいただいています。さらに近年は行政や民間によるスポーツ施設の整備も進んでいますので、これを生かしたスポーツツーリズムにも注力していきます。また、来年は伊勢志摩サミットも開催されますから、これまで弱かったインバウンドの強化につなげていきたいです。伊勢神宮や鳥居前町の観光資源を生かして、観光地としての魅力をさらに高めていきたいと考えています。

**榎本** 近年、ミシュラン社の観光ガイド『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』において、羽黒山の「杉並木」が3つ星に選ばれたほか、精進料理をはじめとする鶴岡市の食文化が評価されて、ユネスコの「創造都市ネットワーク」(食文化分野)への加盟も決定するなど、市に備わる地域文化、自然景観は外国からも注目を集めています。こうした貴重な地域文化を交流人口の拡大につなげていきたいというのがわれわれの考えです。



外国語表記なども含めて、さまざまな整備が必要になるはずだと思います。こうした取り組みも国や県とともに力を合わせて進めていければと思います。

**細川** いかにして、門前町という地域資源の魅力をさらに高めて、後世に伝えていくか。非常に難しい問題ではありますが、各都市では住民とうまく連携し、効果的に施策や取り組みを進めていることが分かりました。同時に、資金面も含めて、さまざまな課題についてもご紹介いただきました。今後とも、住民と連携しながら、門前町の魅力を一層高め、交流人口の拡大など、成果を上げられることを願っています。本日はどうもありがとうございました。

(平成27年6月10日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。

